

魔法の medicine プロジェクト 活動報告書

報告者氏名： 千松 聡司 所属： 大阪府立思斉支援学校 記録日：2021年2月10日

キーワード： 心理的な安定、環境把握、コミュニケーション

【対象児の情報】

・学年

5年生男児（Y）

・障害名

知的障がいを伴う ASD

・障害と困難の内容

●療育手帳 A（重度に相当）

●服薬 エピリファイを服用

●各検査結果

S-M 社会生活能力検査

◆1年生時

SQ 28 SA 1-10

◆4年生時

SQ 18 SA 1-8

太田 stage

◆2～4年生時

ステージ I-3

●保護者より

- ・フラッシュバックがあると見られる
- ・気候の変化によって体調や気持ちが変わりやすい可能性がある
- ・聴覚、触覚（口腔）に過敏性がある
- ・痛覚鈍麻があると見られる
- ・パニックがあり、強い自傷や噛みつく他傷がある

【活動目的】

- 当初のねらい（計画書の学習目標）と活動による方向性の確認状況
 - ①自分の思いを表出する手段を知り、好ましい表現方法を身につける。
 - ②学校生活に見通しを持ち、学習活動に参加することができる。
- 活動が進むにつれ、追加したねらい
 - ③日常生活全般において、興味関心の幅を広げる。
- 実施期間
R2年6月～R3年2月
- 実施者
千松聡司、渡辺大介
- 実施者と対象児の関係
クラス担任

【活動内容と対象児の変化】

• 対象児の事前の状況

●コミュニケーション

言葉による表出はないが、喃語あり。

くすぐり遊びが好き。

保護者より、内言語は多く、こちらの言っていることが何となく分かっている様子が多く見られるとのこと。

嫌なことややりたくないことがあると、自傷、他傷、失禁等で知らせる。

保護者の願い：好ましい方法で気持ちを表して欲しい。

●認識面、興味、関心

常同的な行動として、ストロー等細長い物を指先で回す。何かにトントンと当てて感覚や音の刺激を楽しんでいる様子。

ST や OT の際、ひらがなとカタカナが読めていたとのこと。（以前はレストランでは、カタカナメニューを見て選択できていた、カラオケで歌っていた等）

色や形のマッチングができる。

トランポリンや追いかっこが好きだったが、あまり見られなくなった。

以前は楽しんでいたことに関心が向かなくなった。（興味、関心の幅が狭まった。）

保護者の願い：何でもいいから学校での楽しみを見つけてほしい。

●日常生活

〈家庭〉

家～学校までは、徒歩5分圏内であるが、強い登校渋りがあるため、毎朝30～40分程度かけて登校していた。（座り込みやパニックになりながらの登校）

家庭では、「はじめに、つぎは」のアプリで見通しを持たせるようにしていた。

学校に行くと伝えると、自傷、保護者への他傷をすることもある。

着替えや食事等、決まった場所で行っているため、スムーズに活動できている。（常に母親がいる安心感もある）

3月～5月の休校期間は、穏やかに過ごせていたとのこと。

〈学校〉

◆学校生活でのこれまでの経過（教員、保護者からの聞き取り、過年度の連絡帳、個別の指導計画等より）

- ・集団での行動からワンテンポ遅れて移動する。活動への参加を促すと、自傷や失禁が見られるため、参加しないことも多かった。
- ・行事は好きで、学習発表会は機嫌よく参加していた。が、テンションが上がりすぎることもあり、それによる疲れから気分の波もあった。（終わりが分からない不安もあった。）
- ・昨年度はとにかく落ち着いて過ごせるように、刺激を避けながら、本児のペースに合わせて活動を選んでいた。
- ・スケジュールの確認は、行事等の際に、紙に絵と文字で予定を示したものを使っていたが、あまり見なかったこと、見るように促すと逃避行動が見られたことから使わなくなった。
- ・校外学習は、本児への対応も考えてなるべく近場で行ってきた。（車いすで参加することも）
- ・4年生から、自傷や他害（噛みつき）の程度が大きくなってきた。頭を打ち付ける自傷があるので、ヘッドギアを装用して過ごしていた。
- ・一人で歩き、好きな場所に移動することができる。
- ・褒められることは分かっており、やりとりの中でにっこりすることもある。
- ・問いかけに対して、タッチで応える様子が見られる。
- ・イヤーマフを装用して過ごしている。

保護者の願い：不安感や恐怖感をなくして、見通しを持って過ごせるようになって欲しい。自信をつけて欲しい。

〈困りの整理〉

- ①要求を正しく伝える方法が分からない。
- ②日々の学校生活で、見通しが立たず、自傷や失禁等で表現してしまう。
- ③興味、関心の幅が狭く、様々な活動への参加に意欲が湧きにくい。

・活動の具体的内容と対象児の変化

目標①『自分の思いを表出する手段を知り、好ましい表現方法を身につける。』について

6月より登校開始となり、本児は緊張しながらの初日を迎えた。

初日より自傷、失禁が多く見られたため、様子を観察する（ログを取る）ことにした。

◆自傷、失禁のパターン

- i) 要求、拒否 <自傷の強さ…中>
- ii) 注目行動、注意喚起 <自傷の強さ…中>
- iii) 刺激を得るため <自傷の強さ…小>
- iv) パニック時のもの（フラッシュバックも含む） <自傷の強さ…大>

の4パターンに分類できるのでは、仮説を立てた。

以下、そのパターン毎に対応して記述する。

i～iv『刺激を置き換える』

自傷をする時の刺激を、教師や対象児本人が掌をパチパチとたたき刺激に置き換える。

→しばらく続けると、児童自ら手を差し出して「たたいて欲しい」要求が見られた。

頭部への刺激の代替として、頭皮マッサージのような刺激の入力を試す。

→ヘッドキャップを外して、クレーン動作により「もっとやってほしい」という要求が見られた。

→頭だけでなく、足の裏や膝、太もも等に手を引いていくことも多い。

何かを匂うことが多く見られたので、本人が好むシトラス系の制汗スプレーやコロンをスプレーした。

→手を止めて嗅ぐ様子が見られた。気持ちが整わない時等に、気分転換の目的で使用した。

i『要求する手段を獲得する』

・即時的に使えるサイン

『ください』『いやだ』の2種類を扱えるよう、要求が出た時には『ください』を促し、したくない時は『いやだ』を挟んでから要求を受け止めるようにした。

→他学年の教師から声をかけられた時、手を横に振って『いやだ』を示した。

その教師の反応「そんなことできるんや！びっくりした！いややねんな。ほなまたね。」

上記に加えて、『何か食べたい、飲みたい』『休憩したい』のサインの獲得を目指した。

→お茶を飲みたい時、お腹が空いた時に、口元に人差し指を当てることができるようになった。

→休憩したい時に『やすみ』の手話を模倣することができるようになった。

・写真カード

本児の好きな物、場所のカードから選択できるようにした。

→ストロー、ワークスペース（後述）、ティッシュ等

・写真アプリ

カードと同様の扱い、その場で写真を撮る対応も可能

（移動場所やスケジュール、活動内容）

→写真をスワイプしながら見ると、自分の要求の写真を

トントンする様子が見られた。

次第に自ら写真を探し、表示させることができるようになった。



・DropTalk (VOCA)

使い方の学習を始めた。強化子としてストロー、くすぐり遊びを選択した。

→はじめは指で何度もトントンしていた。身体プロンプトを繰り返す中で、操作方法（1回タップ）が分かってきた。

操作への手順が本児にとっては多く、こちらからの提示が必要である。

図:使用しているキャンパスと「ストローください」をタップするYくん



ii 『注目行動、注意喚起の手段を置き換える』

- 手を挙げる、近くの教師の手をたたくようにする。
- 肩をトントンとたたくようにする。
 - 頭をたたいている手を、教師の手や胸、肩をトントンたたくように促した。身近な教師の腕を引いたり（クレーン動作）、身体を何度かたたいたりして要求があることを知らせるようになった。
 - また、次第に発声で伝えようとする様子も見られ始めた。（「あー！」「わー！」等の喃語）
- 排泄は、こまめに向かえるようにした。（1時間に1回程度）
 - 写真で示し、トイレに行くことが分かると移動できた。

iii 『刺激を得るために行っている時（手持ち無沙汰な場合）』

- なるべく活動に参加できるように、画像や写真等で見通しが持てるようにし、活動を促した。
 - 移動できないことが減って、活動に参加できることが増えた。
- 手をたたく、頭をゴシゴシするように促した。
 - このパターンはほとんど見られなくなった。
- 感覚遊びの一環で失禁することがある。
 - 失禁したことには触れずに片づける、教師と一緒に後始末をする等の対応。排泄時間については、上述。

iv 『パニック（フラッシュバック）が起きた時』

- 唐突にあるので、予測は困難である。脈絡に関係なくある。場所を変えて落ち着かせる。
 - 落ち着いた後は、活動に戻れることが増えた。

目標②『学校生活に見通しを持ち、学習活動に参加することができる。』について

6月当初は、ほとんど教室の隅でマットの上に座り込んで過ごしていた。

教室の環境は児童12名、教師5名であり、活発に動いたり、話したりする児童も多い。聴覚に過敏性のある本児が落ち着くには、少し厳しい環境である。

本児が落ち着いて過ごすことのできる場所を探したところ、『ワークスペース』というマット等が置いてある場所で座ったり寝転んだりすると落ち着けることが分かってきた。

落ち着ける、安心できる場所を確保した上で、

- i) 登校後の準備、下校時の片づけができる。
- ii) 授業時に教室移動ができる。
- iii) 活動の一部に参加できる。

の3点を下位目標にした。



図:ワークスペースで落ち着くYくん

i 『登校後の準備、下校時の片づけができる。』について

教師が手伝っていたことを、できるだけ自分の力でできるように環境を作り、手順とプロンプトで達成する経験を重ねた。



図: DropTalkによる手順

- 手順を整理する。
音声と写真を使い、順番を明確にする。
→本人の物を写真で使っていたが、徐々にイラストでも対応可能に。
→促しは必要なものの、アプリの必要性が薄れてきた。(12月頃～)
- 場所が分かりやすいようにする。作業をする場所を、マットで示す。
連絡帳や水筒等を置く場所を固定する。
→手順を見たり、促しを受けたりすると一人で行動できるようになってきた。



図:カバンを片づける Yくん



図:足元のマット

図:ワークスペース



ii 『授業時に教室移動ができる。』について

移動の直前に写真を見て移動することを積み重ねた。

- 5年生で初めてのグラウンド移動の際に、写真を見てから移動することができた。
- 音楽室、体育館、デイサービスへの移動、その他様々な場面で移動できることが増えた。

図:運動場



iii 『活動の一部に参加できる。』について

活動のイラストや写真(右図の場合は太鼓のもの)を見ることで、参加できる活動が増えてきた。

◆活動に参加できた活動の例

音楽…和太鼓、ハンドベル、タンブリン等の楽器

体育…座位をとって教師と一緒にラジオ体操、ボール転がし、シャトルラン

図工…描画、スライム作り

ことばかず…マッチング、読み聞かせ、再現あそび

図:和太鼓をたたく Yくん



目標③『日常生活全般において、興味関心の幅を広げる。』について

上記の通り、様々な活動に対して抵抗感が強く、安心して活動することが難しい状況であった。

しかし、できる活動や参加できる活動を増やすことで、関心を持ちやすい物が分かるのではないかと考え、視覚支援を行いながら活動への積極的な促しを行うようにした。

以下の3点を主眼とし、この目標達成へとプロセスを踏んだ。

- i) これまで参加できなかった活動へ参加できる。
- ii) 教師だけでなく、児童同士で関わりを持つことができる。
- iii) 活動できた姿を振り返り、達成感を味わう。

i 『これまで参加できなかった活動へ参加できる。』について

動画や写真で活動を見てから、活動へ参加することを促した。

動画や写真は、事前に視聴し予習しておくことやその場でクラスメートが活動している場面をタブレットで撮影し、確認することに有効性を感じた。(画面だと見るべき場所が分かりやすいため、情報を理解しやすい。)



図:卓球に参加



図:学習発表会へ参加(左下)



図:30m走、完走

※エピソード

学習発表会の練習期間から当日まで約3週間あったが、学校でも家庭でも前年度に比べて落ち着いて過ごすことができていた。

ii 『教師だけでなく、児童同士で関わりを持つことができる。』について

前年度の状況…クラスメートとの関わりは皆無であった。

要求の手段を獲得し、周囲の人に伝えることができるようになってきた。担任の見守りの下、数名のクラスメートに関する時間を作った。本人の好きな、くすぐり遊びと追いかっこをすることにした。



図:くすぐりの要求をして、膝を差し出す
10月



図:追いかっこで捕まる
11月

※エピソード

左図のように、クレーン動作でくすぐって欲しいことを伝えたり、追いかけられると様子を伺いながら笑顔で逃げたりする様子が見られるようになった。他にも、自らiPadを使っている児童の横に行き、肩をトントンしてから『貸して欲しい』サイン(お願いのサイン)を出すことができた。

iii 『活動できた姿を振り返り、達成感を味わう。』について

iPad で写真アプリを開き、一人で見るできるようになってきたタイミング（12月より）で、学校での活動を家庭に持ち帰り、保護者と共有する経験を重ねる取り組み（宿題）を始めた。

また、家庭でも差支えのない範囲で本児の様子を撮っていただき、学校で共有することも併せて行った。

家庭の動画については、恥ずかしそうな様子も見られたが、教師の言葉かけにタッチで反応する場面もあった。

●その他

- ・気圧や天候によって、気分の波がある可能性について
行動ログと、気象庁のデータを照合（気圧、湿度、気温）したが、関連性は見当たらなかった。
- ・2学期より、ヘッドギアを持ち歩く必要がなくなった
自傷の回数が大幅に減ったこと、時間が短くなったことから、学校に持って来なくなった。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

- ①対象児は、写真や動画等の視覚情報を使って見通しを持つことで、活動に参加しやすいのではないか。
- ②対象児は、適切な要求の手段を獲得することで、好ましい表出をすることができるのではないか。
- ③対象児にとって、写真や動画は自分を肯定的に振り返るためのツールになり得るのではないか。また、それがコミュニケーションになり得るのではないか。

・エビデンス

①対象児は、写真や動画等の視覚情報を使って見通しを持つことで、活動に参加しやすいのではないか。について

- ・写真や動画を見ることで、これまでに参加の難しかった活動にも参加できるようになってきた。
上記に加え、ボール運動、清掃活動等

- ・以前から本児を知る教師の声
「歩いてる！すごいね！」
「運動場で走ってるの初めて見たかも！」



図：清掃活動



図：ボール運動

- ・登校時間

徒歩5分圏内の自宅から学校まで30~40分かかっていたところ、現在では10分以内になった。
保護者の連絡帳より…「今年度、登校一つに目を向けても、すごく変化を感じています。」

- ・校外学習のエピソード

事前学習で行先を何度も確認し、当日もバスの中で何度もiPadで写真を確認しながら移動した。元々、ニフレル内のワンダーモーメンツというコーナーがお気に入りであるが、学校として行くことは初めてであった。保護者との打ち合わせを経て当日を迎えた。その内容は、

1. 何度か行っているが、その中で本人にルーティンができてきていること（一旦コンビニに寄ってイスに座る）
2. 無事に行けるか、中に入れるか分からないこと
3. ワンダーモーメンツが大好きであること

の大きく3点である。3番に注目し、ワンダーモーメンツに入ることを目標として校外学習に行った。

万博記念公園に到着すると、いつもと入口が異なることでバスから降車できなかった。

写真を確認することで歩き出すことができた。

普段のルーティンができていなかった為、ニフレルへの入館が難しかった。事前にそのルーティンを聞いていたので、当該コンビニの写真を提示すると、それをトントンとして向かうことができた。コンビニのイスに座って、少し休憩をすると、ニフレルに入館することができた。

ワンダーモーメンツで過ごした後は、出口まで歩きお土産を購入することができた。



図：ワンダーモーメンツにて



図：コンビニのイス

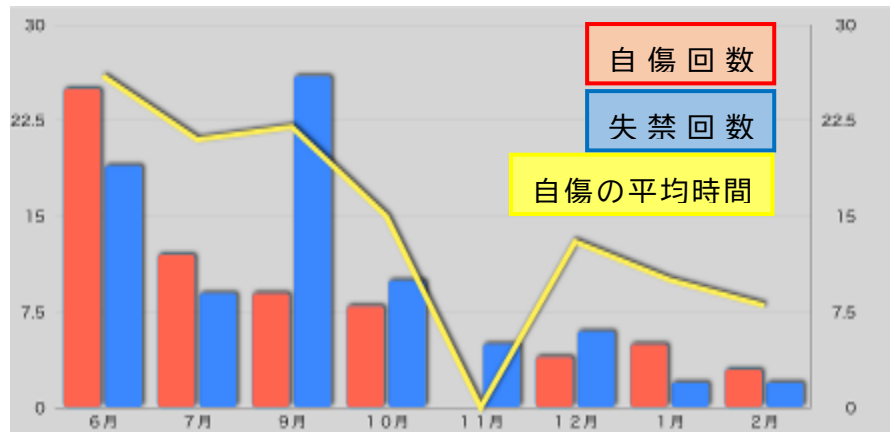
②対象児は、適切な要求の手段を獲得することで、好ましい表出をすることができるのではないか。について

・獲得し、自ら表出できるサイン

身振り	手を横に振る	手をタッチする	両手を合わせる	口元に人差し指
意味	NO	YES	お願いします	お茶飲む・お腹空いた

自傷や失禁の回数が減少し、サインと絵カード、クレーン動作、声等を併用して思いを伝えようとするが増えた。また、写真を表示してワークスペースに行くことや、何か食べたいことを伝えることもあった。

徐々に自傷、失禁の回数共に減少傾向にある。平均時間については、原因のはっきりするものよりも、フラッシュバック等に起因すると見られるものの方が、時間が延びやすい傾向が見られた。失禁についても、トイレに間に合わない原因以外はほぼ見られなくなった。



回 グラフ:自傷、失禁の頻度の推移(1か月単位) 分

※補足
 8月の登校日は、前半を7月、後半を9月に合算。
 9月の失禁回数が多いのは、この時期に排泄物で感触遊びを楽しんでいることが多かった。
 11月は感染症防止による休校が、7日間あった。

③対象児にとって、写真や動画は自分を肯定的に振り返るためのツールになり得るのではないか。また、それがコミュニケーションになり得るのではないか。について

・校外学習のエピソード

ニフレルでの様子を撮影したものを、繰り返し見ており、達成感を得た様子であった。連絡帳の記載にも、『ニフレルの写真をよく見ていて、やりきった感があるみたいです。』との記載があった。



図:ニフレルの写真を見返す



図:ニフレルでお土産を買う

・家庭の様子(保護者への聞き取り)

iPadを見たい、見せて欲しいという表出が増えた。

見返している動画は、その時々で異なるが、見る場面はだいたい決まっている。自信の表れ?振り返り? 実践前と比べて、学校のことを話題にすることが増えた。

自分がしたことを見返して、それを褒められたり興味をもって声をかけられたりすることが嬉しそう。

動画や写真をよく開けていて、見て欲しいのかどうかは分からないが、同じ場面を開くので何か伝えたい感じがする。

・学校での様子

学習発表会で使用した楽曲を自ら再生していた。

公園へ散歩にいった動画を何度も見返していた。

家庭で撮影してきた動画を見ながら、タッチをしたり手を振ったりするやりとりができた。

・その他エピソード

・以前興味のあったことが、再びできるようになった。

ボール遊び、追いかっこ、トランポリン等



・課題についても、できることが増えた。

冬休みの宿題（文字マッチングの課題）を動画で説明した。

→余裕でできましたとのこと。



・ピザトーストの作り方の動画を興味深く見ており、何度も再生している

ことを保護者に伝えると、これまでピザトーストは食べなかったにも関わらず、

家庭で作って食べることができた。家庭でもその動画を何度も見ていたそうである。

・今後の見通し、展望

①現在、要求を正しく伝える方法は、即時的なサインや絵カード（アナログ）が扱いやすいが、写真をスワイプして必要な物を表示させることができ、今後の表出の広がり期待が持てる。

→空腹の時、給食のシーンを表示させて口をトントンとするサインが見られた。

②日々の学校生活で、見通しを持つためには、写真や動画等の視覚情報が必要である。また、徐々にスケジュールの幅を広げ、内容を詳細にしていくことでより安心して生活できるようになって欲しい。

③興味、関心について、写真や動画で振り返りをしつつ、自己肯定感や達成感を味わえるように引継ぎたい。

・次年度に向けて

・教師とのラポール形成が大切である。要求を伝える必要性を感じられるように関わっていききたい。

・支援をするにあたって、対象児の要求をくみ取って一方的に与えるのではなく、双方向のやり取りになるように（因果関係が分かりやすいよう）関わる必要がある。

・各活動に関しては、事前の視覚情報（iPadが望ましい）が必要である。特に、場所についての情報を見ることで安心して移動ができる。活動については、参加の有無を本人に確認し、少し様子をうかがってから参加できることも多い。（活動の様子を動画で撮影し、その場で見ることも有効）

・表出は、即時的に使えるサインをいくつか獲得できている。しかし、高次的な表出を引き出すためにも、写真や動画、カード等を積極的に導入していく必要がある。

・聴覚よりも、視覚情報が優位である。言葉かけを繰り返すよりも、写真や動画を見る方が伝わりやすい。

・休憩が必要な場合がある。（フィジカルではなく、メンタル面）その場合は、本児の納得できる場所と一緒に決めていくことが大切である。